

はゆま ち  
駅路に

引き舟渡し

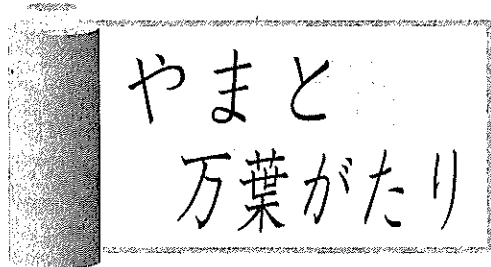
たた の  
直乗り

いも  
妹は心に 乗り

作者未詳(巻十一・二七四九)

この歌は、舟に寄せ  
て歌い手の思いを述べ  
た歌の一つで、後半の  
「直乗り」(びったり  
と隙間無く)彼女の存  
在が私の心に「乗った」  
を引き出すために、前  
半の「駅路に引き舟を  
渡すように直乗り」  
(まっすぐ進む)とい  
う表現を用いていま  
す。「直」の意味が前  
半では「直線的に」、

後半では「直接的に」  
と異なっており、「直  
乗り」という両義性の  
ある言葉を用いて後半  
部を導き出す点が表現  
上の特徴です。  
駅路とは、中央と地  
方をつなぐ交通・通信  
手段として古代の日本  
国家が全国に設けた道  
路です。駅馬と呼ばれ  
た早馬が高速で走行で  
きるよう、可能な限り



一直線に造られまし  
た。公的な使者の証し  
として駅使に与えられ  
た駅鈴を鳴り響かせな  
がら駅路を一直線に疾  
走する駅馬の姿は、古  
代の人々にとって印象  
深かったらしく、『万  
葉集』には駅馬を主題  
とする歌が複数ありま  
す(巻十四・三四三九  
番歌、巻十八・四一一  
○番歌)。直乗りにま

っすぐ進むというこの  
歌の前半部は、当時の  
人々が直線状の駅路を  
よく見知っていたこと  
を踏まえた表現と言え  
ます。

この歌からは、駅路  
が河川と交差する地点  
に「引き舟」が設けら  
れていたこともわかり  
ます。引き舟とは、河  
川の兩岸に綱を張り、  
綱をたぐって対岸に渡  
る仕組みの舟を指しま  
す。舟の進路を安定さ  
せるため張力を保つよ  
う、綱は一直線に張ら  
れました。駅路と引き  
舟の綱がともに直線状  
であることが、「直乗  
り」という表現の効果  
を強調しています。  
古代の日本では、河  
川を渡る施設としての  
橋は限られた重要な場  
所にしか設けられなか  
ったとされます。橋以  
外の渡河手段について  
記した古代の文献は少  
なく、この歌は駅路の  
渡河点に引き舟が設け  
られていたことを示す  
史料として、貴重な内  
容を伝えていると言え  
るでしょう。  
(県立万葉文化館主任  
研究員・竹内亮)

【訳】駅路に引き舟を渡してまっすぐ進むよう  
に、彼女は私の心にびったり乗ってしまっただよ。

# 山吹の にほへる妹が はねず色の 赤裳の姿 夢に見えつつ

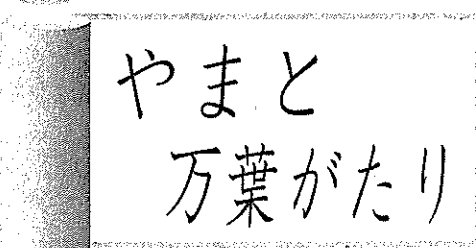
作者未詳(巻十一・二七八六)

当館の万葉庭園では山吹が咲き、鶯の鳴き声が響いています。一般的なお花見の時期を過ぎてなお、目にも耳にも春を楽しむことができます。

今回の歌は、作者がわからない恋の歌を集めた巻十一に載る、男性が女性を思う歌です。

この歌では実際に山吹の花を見ているわけではなく、山吹のようにあでやかな女性、と喩えに用いています。

「にほへる妹」を導く例としては、有名な「紫のほへる妹を憎くあらば……」(巻一・二一)と、今回の例があるのみです。女性の輝きを印象つけるのに紫と山吹が用いられています。紫は最も高貴な



色として知られます。山吹は愛しい人を重ね合わせる植物として好んで詠まれました。

「はねず」は淡い紅色の花をつける庭梅のことと言われます。『万葉集』に4例あります。『万葉集』に4例以外の3首は「つらふすなわち色あせることを歌います。赤裳」というだけでなくあえて「はねず

色として知られます。色の中は、相手が自分の赤裳を着用している姿で、恋の不安定さも暗示しているのかもしれない。さて、この歌では愛しい女性が夢に見えたことが、この歌以外の3首と歌います。『万葉集』

【訳】山吹のように照りはえるあの子の、はねず色の赤裳をつけた姿が、しきりに夢に見えて。

が、今回は作者の男性の思いが強そうです。『万葉集』に夢の歌が100首ほどある中で「姿」が見えた歌の例は4首のみで、今回のように具体的な姿を見る歌はほかにありません。山吹の黄色、はねずの桃色、赤裳の赤色が順に連想され、麗な色つきの夢を見たようですね。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)